



三木市史の地域編とニュータウンの自治体史の意義と課題について（〈特集〉自治体史編さんの現在：参加と活用の新しい取り組み）

廣井，愛邦

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 15:25-31

(Issue Date)

2023-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489531>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489531>



三木市史の地域編と

ニュータウンの自治体史の意義と課題について

廣井 愛邦

はじめに

当市の市史編さん事業の概要については、かつて川内淳史・進藤輝司や木村修二が『LINK』誌上^①で具体的に触れているし、当市史の事務局が刊行している『市史研究みき』^②にも事業の全体的な概要について紹介していることから、詳述することは避ける。概略的には次のとおりである。新しい三木市史の編さん事業は、神戸大学との提携のもと、平成二六年度からスタートした。当初は、市長部局の総務部に属し、神戸大学から派遣された教員と市の事務職員、事務補助員の三人でのスタートであった。

その翌年（平成二七年）、教育委員会部局に所管替えが行われ、

文化スポーツ振興課が担当部局となった。しかし、勤務体制は一人いた事務補助員が教育委員会に移管後は削減され、むしろ後退した感があった。本格的に業務が行われることとなったのは、三年目の平成二八年度からである。

この年は、五月五日に国史跡である三木城跡に「みき歴史資料館」がオープンしたことに併せ、市史編さん事務局もスタッフの充実をはかることができ、事務職員、神戸大学からの派遣教員に加え非常勤専門員二名と事務補助員一名を採用することができたのであった。この体制の強化の中で、ようやく市史編さん事業の具体化が図られたといつてよい。

このように本格的に動き出したのは、事業が始まって三年目からであるが、当初から一貫していたのは、研究者や専門家がまとめる通史編と住民参加型の地域編が両輪となって市史編さ

ん事業が展開されるということであった。そして、市史を刊行していく目的を地域づくり、まちづくりに活かすこととした。そこで、ここではこの両輪の片側である地域編のうちニュータウン史に関する取組を紹介しつつ、本市の状況をもとにその意義と課題について述べてみたい。

一 地域編とは

さて、当市における通史編とは、これまで数多くの自治体に取り組んできたオーソドックスなスタイルのことをいう。つまり、大学教員や研究者が史料調査を行い、見出された史料をもとに歴史叙述を行っていくもので、当市史においては、本文編三巻、資料編五巻で構成されている。

では、地域編はどうか。まず、巻構成であるが、当市の場合、地域編をまとめていく単位を社会教育施設の公民館を単位とした。市内には公民館等が一〇館あり、それぞれの地域コミュニティの中心拠点として機能していると判断されたからである。地域づくり、まちづくりは地域コミュニティを「核」として行われる。その「核」を単位とした図書でなければ、地域住民にとっても十分に活かしきれないであろう。したがって、複数の地域を包含せず、それぞれが一冊の地域史としてまとめ上げることになったのである。これが、当市における自治体

表 三木市史地域編の巻構成

巻	地区名	範 囲	刊行年度（予定）
1	三 木	旧三木町・久留美村のうち、三木南地区を除く	2022年
2	三木南	三木・別所・志染地区のうち三木南エリア	(2026年)
3	別 所	別所町のうち三木南地区を除く	(2023年)
4	志 染	志染町のうち自由が丘、青山、三木南地区を除く	2020年
5	細 川	細川町全域	(2024年)
6	口吉川	口吉川町全域	2019年
7	緑が丘	緑が丘町全域	2021年
8	自由が丘	自由が丘地区全域	(2025年)
9	青 山	青山地区全域	2022年
10	吉 川	吉川町全域	2021年

史編さん上の最も大きな特色といえる。これは、各地域の人たちが自分たちの地域の図書であるという自負を感じ、今後のまちづくりに活かす最善の方法であると判断したからである。巻構成については前頁の表を参照していただきたい。

図書の内容であるが、概ね次の事柄があげられる。

- 1 地域の場所（三木のどの辺りにあるかなど）
- 2 地域の自然と景観
- 3 本編では取り上げられない地域の歴史
- 4 昔から伝えられている地域の伝承・伝説
- 5 地域の伝統行事
- 6 郷土出身の人物
- 7 現在生きている皆さんの思い出（地域に関係すること）
- 8 年表
- 9 史料編

これらの中には、通史編と重複するものも含まれるが、仮に重複したとしても地域住民の目線と研究者の目線との差が出てくれば逆に興味深いものになると考えている。

地域編ならではのものは、4と7があげられよう。

次に、これらを自治体史としてまとめ上げていくに当たっては、それぞれの地域の住民で構成される一〇の地域部会ごとに、

情報交換や史料調査、聞き取り調査の計画などを立案していくことを前提として取り組みが行われた。ただ、事務局も図書刊行までのスケジュール管理や原稿量の把握はもちろん、部会活動が円滑に進むよう、情報提供、問題提起をしていく必要があり、そのためには事務局員がむしろ積極的に地域に出向き、情報の収集、情報発信に努めてきた。

二 ニュータウン史の編さん

市内一〇地区の中に、いわゆるニュータウンと呼ばれている地区が複数ある。このうち、社会教育施設の公民館が置かれているのは、緑が丘、自由が丘、青山の三地区である。

これらニュータウンに対する一般的な認識は、「歴史がない」である。これら「歴史がない」三地区を一冊にしてはという意見もあったが、三冊としたのは、前述の理由からである。

さらに付け加えると、一冊にしてしまうことで、「歴史がない」ことを暗に認めた形になってしまう。緑が丘の場合、まちびらきをして五〇年になる。二〇代そこそこで土地を購入して移り住んできた若者も今ではもう立派な「高齢者」である。まちびらき当初に居住してきたこうした方々が、できて間もない新しい町をよくしようとまちづくりに取組んできた経過は、まさに歴史そのものであるし、何かと変遷をたどりつつも五〇年近く



写真1 緑が丘町航空写真

行われてきた夏まつりなどは、この地域にとっては伝統行事である。住民自身が認識を新たにし、そして次のまちづくりの糧としてこのニュータウン史を活用してもらう必要性を感じたからこそ、あえて三冊としたという経緯がある。そのかいあつて、部会員の皆さんのご理解を得、令和四年度の段階で三冊のうち『緑が丘の歴史』及び『青山の歴史』の二冊を刊行することができた。

そこで、ここでは主に三木市緑が丘町のニュータウン史の編さん過程について述べてみたい（写真1）。

緑が丘部会は、平成三〇年（二〇一八）一二月に発足した。部会員の選任については、緑が丘地区区長協議会副会長（当時）の矢野進氏を中心に、民生児童委員、老人会、商店街、子

育てといった方面から各一名ずつ、計五名の方に加わっていた。また、オブザーバーとして同地区区長協議会及び緑が丘まちづくり協議会会長、まちびらき当初から自治会活動に携わってこられた方にも「御意見番」として加わっていただいた（写真2）。

部会の立上げ当初は、ニュータウンで歴史の書を作るということにためらいを感じる部会員もいらっしやった。というよりは、ほぼすべての方が

がそう感じられていたと思われる。ただ緑が丘には前例として大西國一氏による『緑が丘のあゆみ』という書籍が昭和五七年に刊行されていた。全体で六八ページとコンパクトであるが、イメージ作りをする上では、非常に参考になり得た。「歴史が浅い」、「深い」はと



写真2 緑が丘部会



写真3 聞き取り調査

もかく、まちびらきから今日までの歴史をまとめていくのだという認識は、部会を重ねていく毎に深まっていた。

部会が軌道に乗ると、町びらき当初を知る住民約二〇人のリストアップをした。実際は、亡くなられたり、転居されたりなどで約半数の方に聞き取りをすることができた。このときも

部会員で分担し、そこに事務局員が加わるようにした。また、老人クラブ員のうち、九〇歳以上の会員数名からも聞き取りを行った。この方たちは、クラブ員としては第二世代に足るのではないだろうか。

また、かつて開発業者の大和ハウス工業㈱に勤務していた緑が丘の営業担当者からお話をお聴きすることができた（写真3）。同時に、今から五〇年前のまちびらき当初の住宅販売用

の広告、パンフレットを見せていただいた。そこには、家の間取り、坪数、販売価格、グレードなどが掲載されており、家の建て替えが進む今日、緑が丘町内においては貴重な歴史史料といえるであろう。ただ、この営業担当者は、残念なことに『緑が丘の歴史』の刊行を見ずしてご逝去されてしまった。

自治会からは、自治会新聞、新聞のスクラップブック、アルバムなどの資料提供を受けた。

また、子ども会からも子ども会ニュースなどを借り受けた。

これら文字媒体のうち、特に自治会新聞には自治会のあり方やまちづくりの進め方をめぐる熱心な議論の経過が詳細に記載されていた。

また、このほかに部会員、オブザーバのお知り合いからの資料提供を受けることもあった。特に写真資料は、文字が主体の自治会新聞の情景を思い浮かべることに役立った。

開発前の地権者からも聞き取りを行うことができた。また、旧村の絵地図、都市計画図などと聞き取り内容を照合しつつ検証することで、開発前後の変化をより具体的に理解することができた。

三 成果と課題

市としては、市史の編さんの目的は、農村地区やニュータウ

ンに限らず、住民参加のもとで地域の歴史を明らかにすることにより、しっかりとした地域の「骨格」を築くとともに地域のアイデンティティを構築し、今後の地域づくり、まちづくりのツールとして活用してもらいうことにある。そういう意味において、「歴史がない」といわれてきたニュータウンにあえて「ニュータウン史」作りが進んでいることは、今後のニュータウンの再生に当たって意義のあるものであると考えている。

まち開き後間もない頃に地域のシンボルとして植えられたクスノキの周辺には雑木が密集していたが、刊行後、これらの多くが伐採され、環境整備が行われた。また、緑が丘町老人会(現・友愛クラブ)の記念誌の編さんに当たり、『緑が丘の歴史』がよい刺激になったとの報告を耳にした。

前述のとおり、『緑が丘の歴史』は、まちびらき当初から『みどりがおか自治』『自治會館だより』といった自治会関係新聞や子ども会新聞が積極的に発行され、かつそれぞれの団体で丁寧に保管されてきた。特に緑が丘には自治会館という箱物があつて、そこに集う人々の間で守られてきたことが大きい。

しかし、平成二〇年代半ば以降、個人情報保護といった視点の高まりやペーパーレスの風潮のためか、ページ数が減り、それに伴って情報量も少なくなってきた。このため、『緑が丘の歴史』の編さん過程において記述の対象となる事象の前半から中盤にかけては積極的に事跡を追うことができたが、結末

の段階に至って情報が途絶えてしまうという事態にしばしば出くわした。しかも刊行までの時間的な制約、コロナの感染拡大といった予想だになかった状況の中で、事柄の当事者を探し当て聞き取りすることもできなかったことも多々あった。科学的な統計をもとに述べるわけではないが、パソコンやスマホが普及した今日においては、ペーパーレス化もあいまって、ちよつとしたやり取りは、メールやLINEで済ましてしまうことが一般化してきている。また、コロナ社会を契機としたオンラインによる会議の普及に伴う資料の省力化も、時代の検証を行う際の不安材料である。

今日より先の地域史や現代史を描くことは、今以上に困難になってくるものと思われる。せめて、対外的なやり取りの文書や組織内で作成された文書を紙ベースではなくともデータとして意識的に保存しておく必要がある。

地域の歴史や文化を知することは、まちおこしには必須であろうから、今後、新たなニュータウン史をまとめることのためには言うまでもなく、歴史や文化を活かしたまちづくりを行うさいには、いかに史資料を保存し記憶を記録化してきたかが重要になってくると思われる。

最後に、この度の刊行物を地域の中でオーソライズさせてしまうと、地域の新たな歴史的な見つけ直しが行われなくなってしまう恐れがある。

歴史を踏まえた地方創生、まちづくりのためには、絶えず刊行された図書の内容の掘り下げ、見直しや新たな事実の発掘を逐次地域として行う作業が望まれる。いずれにせよ、このニュータウン史が地域を見つめ直すきっかけとなり、新たなまちづくりに活用されれば、幸いである。

註

- (1) 進藤輝司・川内淳史「三木市における地域歴史文化の〈場〉——三木古文書研究会と市史編さん——」(『LINK』九、二〇一七年)、木村修二「新三木市史地域編の発刊と現状」(『LINK』一四、二〇二二年)
- (2) 三木市史編さん事務局「新三木市史編さん事業の概要」(『新三木市史研究紀要市史研究みき』二、二〇一七年)